

みなさん、おはようございます。本校は2学期制を採っており、今日は後期の始業式、つまり折り返し点ということになります。

まず、やまぎん県民ホールを借りての城北祭ですが、もともとは4年前、コロナの1年目になりますが、体育館での密を避けるために始めたものです。そして、文化部やクラスの発表、個人によるパフォーマンスが年々レベルアップしていると感じます。照明や音響など、どれをとっても一流の舞台で、いい演技、いい演奏をしたいという意欲を感じました。パフォーマーでは希望する生徒全員が発表するという事は叶わず申し訳ないのですが、おそらく来年はもっと出演希望が多くなることが予想され、部活動とクラス発表を優先させながらも、多様なパフォーマンスが見られる舞台にしたいと考えています。

サプライズゲストについては、すっかり城北祭の目玉になりました。また、今年のPTA研修会は競泳の池江璃花子選手のお母さんにご講演いただきました。お笑い講演会で明らかに異なるのは、講演会の方は話し手の力量に加え、聞き手の力量も問われるということです。保護者アンケートで「あきらめない心や信じる心、時間を守る心、挨拶をすることなど、当たり前のように実は難しい。当たり前ができる人になれるよう親子で精進したいと感じた。もう少し早くこんな素晴らしい講演をお聞きしたかったと思ったが、スタートラインはどこからでも引けるのだと感じたので、新たな気持ちで今後の子育てに活かしたい。」というものがありました。講演を聴いてどう感じるかは人それぞれですが、実は一人ひとりの「聴く力」が問われているのだということに改めて確認しておきたいと思います。

個人的に一日目で最も印象に残ったのは2年1組の合唱です。2日目に運動部の大会があり公欠になる人が多いことからステージ発表を選んだと聞きましたが、『オワりはじまり』を丁寧に合唱する姿に感銘を受けました。

♪もうすぐ今日が終わる やり残したことはないかい

♪親友と語り合ったかい 燃えるような恋をしたかい

で始まる歌は文化祭にぴったりで、来年はぜひ1日目のフィナーレにみんなで歌いましょう。

2日目の一般公開は4年ぶりということで、試行錯誤しながらだったわけですが、1,500名を超えるたくさんの来場者を迎え大盛況でした。模擬店やお化け屋敷には長蛇の列ができましたが、お化け屋敷では優先的に入場できるファストパスを倍の料金で販売し好評だったと聞きました。これはとってもよいアイデアで、サービスにはそれなりにお金がかかるということを理解してもらって非常に大切なことです。つまり、お金をケチると時間がかかる。しかし、その時間にもまたお金同様の価値があるという事です。いざれにしても、サービスにはお金がかかるということを知っておいてください。そして、そのサービスが様々な仕事を生んでいるのです。

時間といえば、楽しい時間はあっという間に過ぎ、退屈な授業は長く感じる。しかし不思議なことに、過去を振り返った時、退屈で長く感じた時間は記憶の中ではほとんど消えてしまい、逆に短く感じた楽しい思い出は膨らみます。『オワりはじまり』の歌にあるように、2日間の城北祭がかけがえのない時間として、胸に刻み込まれればよいと思います。

城北祭は生徒の皆さんにとっては非日常で、それは私たち教職員にとっても同じですが、大変気を遣う行事でもあります。練習の成果は発揮できるか、教室展示はちゃんと完成するか、熱中症は大丈夫か、食品中毒は起こさないかなど挙げればきりがありません。そういった先生方の思いも理解し、日頃から感謝の気持ちも忘れないでください。

労働の種類は、体の使う部分によって大きく肉体労働と頭脳労働にわけることができますが、教員というのはそのどちらでもない感情労働だといわれます。感情労働というのは、一方的なサービスを提供するだけでなく、顧客とのやりとりで成り立つ職種で、他には看護師やカウンセラー、ホテルのフロントなどもこれに該当します。人が相手なのでとてもやりがいのある仕事と言えます。

そして、感情労働に必要なスキルとして、コミュニケーション力とセルフマネジメント力が挙げられます。特に後者については、自分の気持ちや感情を表に出さず相手に接したり、クレームに対処した後に素早く気持ちを整理したりする力が求められます。しかしながら、自分の感情とは異なる振る舞いを要求されることも多く、ストレスを抱えやすい仕事と言えます。その対応策としては、誰かに話を聞いてもらったり、その場を離れて気分転換をしたりするなど、自分なりにリフレッシュすることが大切です。

実は城北祭が終わったあと、九州の長崎にリフレッシュに行ってきました。もともとはジンギスカンが好きで札幌に行く予定を立てていたのですが、作家の遠藤周作さんが今年生誕100年を迎えるという記事を読み、遠藤周作文学館のある長崎に行ってみようと思いついたのです。実は若いころ、遠藤周作の作品をこよなく愛した時があり、特に代表作と言われる『沈黙』という小説に大きな感銘を受けました。

『沈黙』は、隠れキリシタンが受ける迫害や激しい拷問の中、神は存在するのか、存在するならどうして神は沈黙するのかという根源的な問題を問う小説で、お正月と困った時にしか神頼みをしない私は大変衝撃を受けた本でした。遠藤氏の没後、小説の舞台となった長崎市外海地区に文学館が作られたのは知っていたのですが、これまで訪れる機会はありませんでした。生誕100年の記事が私の目に留まったのは神のお告げかなども考え、ジンギスカンではなくキリシタンにしたということです。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界遺産に指定されている地区で、心動かされることの多い旅でしたが、それについてはまた別の機会にと考えています。旅をすると新しい発見も多く、リフレッシュして帰ってきました。お土産は長崎名物のカステラではなく、東日本では手に入らなくなった明治のスナック菓子「カール」にしました。

最後になりますが、いよいよ10月、3年生にとっては様々な選択の時がやってきます。不安でいっぱいになることもあるでしょうが、あらゆる選択は君たちの人生を決定するなどということではなく、単なる通過点に過ぎません。良い準備し、ベストを尽くす、それだけでいいのです。選択は決定ではなく通過点…この言葉を3年生の皆さんに贈り、後期始業式の式辞とします。(R5.10.02 令和5年度後期始業式式辞)